



## 19年ぶりのインタラーケン

中西 卓

今夏 2 週間あまり中部ヨーロッパを一人旅してきたが、その中でひとときわ印象に残ったのがインタラーケンでの一日だった。19 年前に勤務先でリフレッシュ休暇をとってスイスを 10 日間旅したが、グリンデルヴァルトからインタラーケンへ日帰りしたときのユングフラウの夕映えが忘れられず再訪することにした。今回は現地のユースホステル（以下 YH と記す）に泊まったのでとっぷり日が暮れるまでリゾート地を堪能することができた。

チューリヒからベルンで乗り換えてインタラーケン・オストに着いたのが昼前で、すぐに前回見送ったハルダールの丘へ標高差 750m をケーブルカーで登った。手軽に行けるハルダールは真下にホームベースの形をしたヘーエマッテ広場（上の写真）、左右に二つの湖、正面 山の奥にアイガーを望む人気の展望台である。一休みしてからオストに戻り、閑静な住宅地を抜けてヴェストまで歩いた。日はまだ高いが、ヘーエマッテの縁にあるカフェテラスに腰をおろして、ビールとサラダを注文した。サラダにはパンがつくので昼食はこれで十分。19 年前も同じ店だったから、自分ながら一見ではないつもり。ここでゆっくりしたあとヘーエマッテを囲むベンチに移動した。一人でいると、やがて中年夫婦が隣に座ったので声をかけたらサウディアラビアから来たと言う、写真を撮りあってからメールアドレスを交換、KHALID Wosaifer さんだった。



夏時間の 5 時はまだ青空が広がっているが、山の稜線に 5 つ 6 つのハンググライダーが鮮やかな彩を競っている。高度を下げてくると中にはアベックで一つの傘にぶら下がるのもわかる。1 時間余りそれらが目の前の草地に降り立ってくるさまはビデオカメラに収めたい情景である。世界各地から来ているであろう飛行家が思いおもいに楽しんでいるように見えるが、彼らは傘をたんだあと仲間とどんな交流をするのか、他のスポーツと比べて体力や競技などはどうなのか、我国でも珍しくないがこれまでは考えなかった。

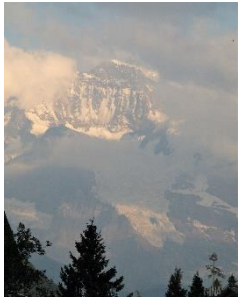
そうこうしていると、自転車に乗った女性がベンチの前に止まって布教活動を始めた、サウディ夫妻が駄目とわかると今度はぼくに話しかけてきた。仏教徒だからと言ったがかわらず、手帳サイズで日本語の「マタイによる福音書」を手渡されたので有難くいただいた。わが蔵書に初めて聖書が加わることになった。彼女はドイツ出身でここに住んでいる。



遠くからジャズが聞こえてきたので腰をあげて近くまで行ってみたら、6 人のバンドに 20 人ほどの聴衆がリズムに乗っている。日暮れどきに大通りのホテル前で、老いた男女が聖歌隊の扮装で賛美歌を合唱しているのに出くわした。輪の中にアコーディオンを伴奏する爺さんもいた。

ベンチを幾つかたどるとお洒落なお嬢さんたちがいたのでカメラを向けると端の幼子が席を立て隣ベンチの両親に駆け寄り「あの人に写真を撮らせてもいいか？」と僕のほうを向いて問うている。お父さんが OK したらしく席に戻って微笑んだので、「ありがとう撮らせてね」と無言でお礼、そのあと両親にもお礼を言って少しばかり話したらカタールから来たとのこと、かつてカタールでラスアブフォンタスの水処理施設を担当したことを告げると親しみを覚えたのか、自分たち夫婦の写真も撮らせてくれた。美男と美女のカプルであった。イスラム圏からの女性は黒っぽい衣装を纏っているが、皆さんここでの表情は明るい。





ヘーエマッテは山に囲まれているためか、それとも快適な時間に我を忘れたのか太陽の傾きが気にならなかったが、夏時間の8時にもなると遥かに望むユングフラウが赤み帯びてきた。これを見るために多くの旅人がベンチに陣取っているようだ。9時過ぎに腰を上げてオストに向かった。途中、みやげ物屋でつば広のハイキング帽を買った。安価で気に入りの買い物があったので「ダンケシェーン」と言ったら、一人店主のお婆さんから「ピテシェーン」が返ってきたので何やらうれしい気持ちになった。

オスト駅まで来たら10時を過ぎて路線バスが終わっていたので、街外れのペーニンゲンまでタクシーに乗った。旅先でこんなに遅くなることはめったにないが、ゆっくり一日楽しんだのだからと上段ベッドを覚悟でチェックインした。6人部屋に中国人青年4人が先住、僕が扉を開けると起き上がって挨拶しか団の一人が自分のベッドを譲ると言うので有難く厚意を受けた。ここ数年の海外旅行の中で今回感じたのは、幾つかのYHで中国・台湾・韓国の青年たちと出会ったが彼らに共通するのはマナーがよく、勤勉らしくて、英会話が上手なことである。なぜか今回も日本人学生に旅先で会わなかったが偶然ではないようだ。

ここペーニンゲンYHはブリエンツ湖畔にあって湖に面した広い裏庭が心地よい。犬を連れて人、自転車の人が湖畔の路を行くのも絵になる。街中に立派なホテルがあるのに、ここを選んだらしい老夫婦がテラスで朝食をとっている。何もかもが爽やかだ。



言うまでもなくスイスは屈指の観光国であるが、九州よりもやや狭い国土にアルプス山地と点在する湖、発達した交通機関が客を呼ぶ。国際紛争から距離を置いているためか、安心な旅ができる。他方、ユーロでない通貨、ユーレイルバスの圏外であるなどホステラーに厳しいこともある。[その後、ペーニンゲンYHは閉鎖され、街中に新しい施設ができたことを伝えておく]

**後記** “あゆみ(Ⅲ)” <岡山県ユースホステル活動50年の記録> が発刊されてから9年になる。その中に同じタイトルの拙稿があるが、デジタルで復刻、写真をカラーに変えて再読していただければと思った。5年前、新聞記事にわが意を得たりと書いた‘補遺’をこの後につけたので、併せて読んでいただきたい。

30年前の岩波新書「私のスイス案内」笹本駿二著はスイスの生い立ち、住民自治、国民生活などを述べているが、中世に傭兵の苦難を経て今日の国際貢献・中立があることやこの国の大統領は電車通勤で乗り合わせた市民と気軽に挨拶を交すのに政治の一端を知ることができる。天然資源の乏しさから時計産業やABBのような重電機械メーカーが育ったのも。タックスヘイブンの一面もある金融システムに我国の政治家は羨ましいのではなかろうか。金正恩氏がスイスに留学したことも知られるが、とにかく懐が深い大人の国である。



**【終わりに】** 初めのスイス旅行での写真(当時のリバーサルフィルム・プリント)を添えて、30年前の姿をお目にかけたい。松本からのSさん夫妻と連れだってツェルマットからのハイキングでは、アルプスの少女?に英語が通じなかった。

末尾になるが、リフレッシュ休暇をレポートした社内報をコピーして、その後のヨーロッパ放浪の端緒になったことに感謝の意を表したい。

